

RETURNS 2

恋話

KOI BANA

さばえ



近松文学賞



10代の瑞々しい青春の一瞬から、
亡き夫を想う80代の愛まで、
幅広い年代の恋愛が描かれていました。

特別審査員 藤岡陽子

BoBoBooks

さばえ近松文学賞

ゝ恋話 (KOIBANA) RETURNSゝ

受賞作品集

2024年

◆受賞作品◆

◆近松賞

「つなぐもの」

平山 美帆 （名古屋市）

◆優秀賞

「眼鏡と少年」

鈴木 裕美子 （大阪市）

「林檎がなったら」

西村 一江 （山口市）

◆佳作

「神様の言う通り」

山下 朋恵（福井市）

「ソーダみるくばあ」

永池 千鶴子（坂井市）

◆特別審査員賞

「Virtual Veil Venus」

千葉 顕（東京都練馬区）

「さばえ近松文学賞～恋話(KOIBANA) RETURNS2」入賞作品発表

【近松賞】 1点	作品名	つなぐもの
(賞金 10 万円、副賞)	作 者	ひらやま みほ 平山 美帆 (名古屋市)
【優秀賞】 2点	作品名	めがねと少年
(賞金 3 万円、副賞)	作 者	すずき ゆみこ 鈴木 裕美子 (大阪市)
	作品名	りんごがなったら
	作 者	にしむら ひとよ 西村 一江 (山口市)
【佳 作】 2点	作品名	かみさまのいう通り
(賞金 1 万円、副賞)	作 者	やました ともこ 山下 朋恵 (福井市)
	作品名	ソーダみるくばあ
	作 者	ながいけ ちづこ 永池 千鶴子 (坂井市)
【審査員特別賞】 1点	作品名	ヴァーチャル ヴェール ヴェナス
(賞金 1 万円、副賞)	作 者	ちば あきら 千葉 顕 (東京都練馬区)
募集期間	令和 6 年 1 月 1 日～6 月 3 0 日	
応募総数	3 4 5 点(昨年より 8 2 点の増)	
応募者県別	県内 44(13%) 県外 301(87%) ①東京都 ②福井県 ③ 大阪府	
年代別	①50 代 69(20%) ②60 代 65(19%) ③40 代 61(18%)	
性別	男性 193(56%) 女性 138(40%) 答えない 14(4%)	
主催者	近松の里づくり事業推進会議	
共 催	鯖江市・鯖江市教育委員会・福井新聞社・福井テレビ	
後 援	(資)加藤吉平商店・Do Company 出版	



特別審査員 藤岡陽子（小説家）

講評

選考の基準は、

- ① 構成力、文章の上手さ。
 - ② 物語としての新鮮さ。
 - ③ 鯖江に関する歴史、文化、産業などが物語に巧く取り入れてあるか。
 - ④ 読み終えた時の感動。
- の4つを軸に審査しました。

1次審査を通過したのは22作品で、その中から近松賞を初めとする6作品を選びました。

いずれの作品もオリジナリティーがあり、恋愛にまつわる短編小説であり、また鯖江に関する歴史、文化、産業を取り入れるという条件下で見事に物語を創っていました。

恋話においては10代の瑞々しい青春の一瞬から、亡き夫を想う80代の愛まで、幅広い年代の恋愛が描かれていました。

また歴史、文化、産業に関しては眼鏡はもちろん、石田縞や漆器などの伝統産業、西山公園などの観光地、まなべ会館など地元の要所、マリンバの聖地であるなど、さまざまな鯖江が登場し、わくわくさせてもらいました。私自身、この審査を通してこれまで自分が知らなかった江を深く知ることができました。

原稿用紙わずか10枚で物語の世界を構築し、さらに読む人に感動を与えるというのは本当に難しいことです。

その大変な創作に345点の応募があり、つまり345人もの方々が挑んでくださったことに心から感謝申し上げます。

最後に、内容は素晴らしいのに、物語のタイトルに工夫のないものがありました。タイトルにも力を入れていただきたい、と思います。

以下、各賞への講評です。

■近松賞

「つなぐもの」 平山美帆さん

元プロテニスプレーヤーの主人公の元に、一通の「間違いメール」が届く。そのメールは鯖江に住む越前漆器の沈金師に宛てた「ニューヨークのアートコンテストで最優秀賞を受賞した」という報せであった、という冒頭の設定から、読み手に先を読ませる技術があった。

沈金師は、漆器に沈金という技法を使って絵付けをする仕事である。その職人の技術が物語に丁寧描かれ、またその技術を使って、主人公の思い出の品でもあるティーカップを修復させるという展開。さらに沈金の技術に心を動かされた主人公が、テニスを諦めなくてはならなかった挫折、自らの傷をも修復させようという意欲を持つ、という物語の展開が素晴らしかった。ラストでは金色の希望が感じられた。満場一致で近松賞に決定。

■優秀賞

「眼鏡と少年」 鈴木裕美子さん

夫に先立たれた高齢の妻が、かつて夫が使っていた鯖江産の眼鏡をかけて外出をする。

すると夫の眼鏡に気づき、子供が近寄ってきて、かつて夫に作ってもらったというおもちゃを見せてくれる、というあらすじ。

大きな展開があるわけではないのだが、子供におもちゃの電話を渡され、天国の夫と会話するという微笑ましくも切ない場面に、感動を覚える。

妻の亡き夫への思いがとて丁寧に描かれていて、いい物語を読んだという気持ちになれた。

子供が夫の眼鏡に気づくのではなく（普通は気づかないと思うので）、主人公が夫が作ったおもちゃに気づくという風に描けばなお自然であったのでは。

■優秀賞

「林檎がなったら」西村一江さん

夫が植えたりんごの苗が、夫が亡くなった後も少しずつ成長していく。そのりんごの木を眺めながら、夫との日々に思いを馳せる。

夫が好んで晩酌していた鯖江を代表する日本酒「梵」のゴールドの飲みかけを発見し、主人公も毎日少しずつ飲んでいく。

りんごの成長が時の流れにリンクしていて、主人公が晩年、穏やかに暮らしていく様が丁寧に

描かれ、静かな感動を残す。

通い詰めていた酒店の店主が、実は主人公の娘の昔の恋人であったというラストも意外性がある。心をつかまれた。続きを読みたい、と思わせる奥行のある作品。

■佳作

「神様の言う通り」 山下朋恵さん

心から愛している恋人からのプロポーズをある理由で断ってしまう主人公。主人公の過去がとても巧みに挿入されていて、人生を迷う35歳女性の心情が描けていた。

■佳作

「ソーダみるくばあ」 永池千鶴子さん

転校を繰り返している高校生の主人公の鬱屈と、青春への期待を織り交ぜた瑞々しい物語。殻に閉じこもった主人公を明るく場所に引っ張っていく高校生男子、小松くんのキャラがとても良く、青春の一瞬のきらめきを感じさせてもらった。

■審査員特別賞

「Virtuai Veer Venus」千葉顕さん

少子化が進み、現代のような学校制度がなくなり、子供たちは仮想空間で授業を受けるという近未来小説。自らのアバターを画面上の「学校」に通わせる。なので同じ教室のクラスメイトも実際に顔を合わせたことがない、という状況。

友達だと思っていたアバターが、実は実際には存在しない架空のものであったという展開に、新鮮な驚きがあった。

恋愛小説とはいえないのでは、という声もあったけれど、着眼点の面白さに点が集まり、「審査員特別賞」に選んだ。SFでありながらリアルな物語を描ける筆者に、期待を込めた。



審査員長 水間 貴子

総評

今回は、昨年度より82点多い345点の応募がありました。数だけでなく作品の質もアップしたというのが、審査員全員の感想です。前回の入賞作品六点の完成度が高かったことが、創作活動を志す方々に刺激を与えたのではと、密かに自負しております。

もう一つ、三月に敦賀まで延伸開通した北陸新幹線の影響も見逃せません。応募作品の中に、この北陸新幹線のことを取り入れたものが少なくなかったからです。県を挙げてのPRのお陰で、福井県に注目する人が増え、鯖江市の近松文学賞を知った方も増えたのではないのでしょうか。応募の約9割が県外からだったことも、そのことを裏付けているように思います。

さて、今回、審査員特別賞を設けて一作品を入賞といたしました。本文学賞の審査基準と少しずれているところがありますが、創作の着眼点、構成などが素晴らしく、選外にしてしまうには惜しいというのが審査員全員の意見でした。筆者の今後の活躍を大いに期待しています。今年も、全ての入賞作品が電子書籍化されますので、是非お読みください。近松が生まれ育った町、鯖江市にまつわる恋話を、多くの方に楽しんでいただけることを願っております。

目次

◆受賞作品◆

◆講評・特別審査員 藤岡 陽子

◆総評・審査員長 水間 貴子

目次

「つなぐもの」 平山 美帆（名古屋市）

「眼鏡と少年」 鈴木 裕美子（大阪市）

「林檎がなったら」 西村 一江（山口市）

「神様の言う通り」 山下 朋恵（福井市）

「ソーダみるくばあ」 永池 千鶴子（坂井市）

「Virtual Veil Venus」 千葉 颯（東京都練馬区）

近松の里 たちまち スタンプラリー

■さばえ近松文学賞 恋話（KOIBANA）RETURNS ■主催者

掲載の受賞作品は応募に際し、送られてきた内容をそのまま掲載しており、校正・校
閲などの編集は加えておりません。

いつもなら、迷惑メールだと思って無視するのに、この時はスマホの画面をタップして内容を読んだ。

友達とのやりとりはインスタのDMだし、メールなんてネットで買った商品の確認か、美容院の予約の確認か、迷惑メールしか来ない。

それなのになぜ、この英語のメールを読む気になったのかは、私にだって説明できない。

「大賞受賞のおしらせ……？」

メールを読み進めていくと、どうやらこれはニューヨークのアートコンテストで最優秀賞に選ばれたこと、素晴らしい作品に審査員満場一致で決まったこと、それから授賞式への参加の案内だった。

「あー……。なるほど」

私は受賞者の名前をみてピンときた。メールアドレスのhとnを入力し間違えたんだきつととはいえ、これも手の込んだ迷惑メールかもしれない。私はパソコンを開いて、「Saha Hinata」と検索をかけた。

「あ、いた」パソコンの画面上に、越前漆器に関する記事と佐羽陽向のホームページ、それからインスタのアカウントが表示された。

ホームページを開いてみて、私の息は止まった。

「すごい、きれい……」

そこには、繊細であざやかな食器が映っていた。説明を読むと、伝統工芸品の越前漆器で、佐羽陽向は沈金師という職人のようだ。

こんな美しい世界があるなんて知らなかった。洋食器の美しさとは趣の異なる、しずかで奥行きのある美しさだ。美術品で食事をするなんて、夢みたいな世界があるのね。思わず、はあ、と感嘆の息が漏れる。

インフォメーションを見て、「やっぱり」と私は頷いた。私のメールアドレスとhとnの一文字違いだ。

「早く教えてあげよう」と、スマホのメールを転送しようとして、ぴた、と手を止めた。

「待つて待つて待つて、この人が私のメールを迷惑メールだと思って読まずに捨てたらどうしよう」

知らないメールアドレスから来た転送メールなんて、怪しすぎる。私なら？ 絶対に見向きもしないでゴミ箱フォルダー行きだ。

だめだめだめだめ、こんなにすごい作品だよ、最優秀賞だよ？ ニューヨークでたくさんの人

たちに賞賛される名誉なことだよ、ぜったい確実に届けなきゃ！

私は使命感に燃えた。燃えながら、佐羽陽向のホームページに記載されたインスタグラムのアカウントへ飛んだ。

「うわあ！」

インスタグラムには、深い赤茶色の器に羽根を彫り、金を入れる工程が動画で載せてあった。なんて細かい、なんて手間のかかる作業なんだろう。画面をスクロールする指が止まらない。どれもこれも、うっとりする作品ばかりだ。

「よかった、更新いっぱいされてる」私はつぶやいた。最後の更新が五時間前で、その前も昨日なら、毎日インスタを開いてる。私はさっそく佐羽陽向をフォローして、メッセージをタップした。

間違えて送られてきたメールのスクショを添付して、メッセージを打つ。

「こんにちは、私とあなたのメールアドレスは非常に似ているので、あなた宛てのメールを受け取ったと思います。ご確認、よろしくお願いいたします。最優秀賞おめでとうございます。すてきな作品で、実際に手に取ってみたいになりました。」

書いた文章を三回読みなおす。長いかな……。まあいっか。

私の名前と連絡先も入れて……。不審者扱いされませんように！　どうかちゃんと読んでくれて伝わりますように！　私は祈る気持ちで送信ボタンを押した。

返事はお気に入りのフルーツティーを飲みながら読書している時に来た。

うっかりお気に入りのティーカップを落として割ってしまったて、割れたカップとともに「お気に入りだったのに、割ってしまったあ！　かなしい」と、インスタに投稿したあとしょんぼりしながら本を開いたら、ピロンとスマホが鳴ったのだ。

「サナさん、こんにちは！　メッセージありがとうございます。まちがいなく、これはぼく宛のメールです。サナさんが親切な方で本当に、本当によかったです！　コンテストの事務局にもメールアドレスの間違いを伝えました。最優秀賞が取れたことを知って、親切なサナさんに救われて、ちょっと仕事が手につかないくらいふるえています。ありがとうございます！」

ああ、よかった。私はほう、と胸をなでおろした。よかった、本当に良かった。

「よかったです。佐羽さん、ニューヨーク楽しんでください」
ふう、ミッシェンクリア！　フルーツティーを飲んで、スマホをテーブルに置こうとした時、スマホがまたピロンと鳴った。

開いてみると佐羽陽向からで、「インスタの投稿見たんですけど、割れたお気に入りのカップ、ぼくが直しましょうか？」と書いてあった。

「え？」どうやって？　私は首をかしげた。佐羽陽向は魔法使いなのだろうか。

私が戸惑って返信せずにいると、佐羽陽向からメッセージが追加された。

「金継ぎっていつて、漆と金で割れた器をつないでなおせるんです。傷は隠さず金で強調するから、前よりきれいだっていう人もいるんですよ」

壊れても、なおせる。傷は隠さず強調する。その言葉に、私はふるえた。

私も、壊れたけど、なおるのだろうか。傷を隠さず、それも私の一部なんだと言える日が来るのだろうか。私はそっと左足を撫でた。

テニスの試合中に起きたケガだった。激痛と、ブチツという断裂音がして、救急搬送された病院で左足の前十字靭帯損傷と診断された時、私は楽観的にとらえていた。

「いつからテニスができますか？ 早く復帰してコートに戻りたいんです」と言った私に、担当医は眉毛を八の字にしてくちびるを一文字にきゅっと結んだ顔を見せた。

それから誠実に、けれど残酷に、「プロとしてテニス続けるのは、難しいでしょう」と告げた。

そのあと、担当医が何を言ったのかは覚えていない。おそらくは通常の生活に支障はないでしょう。とか、リハビリをすれば趣味としてテニスをすることはできるでしょう。とか、そんなこと。そんなこと、どうでもいい。

もう、プロテニスプレイヤーとしての私は、壊れて消えた。それが事実で、どうしようもなく、泣いた。泣いて、泣いて、泣き続けて、最近ようやく、事実を受け入れようと気持ちが落ち着いてきたところだ。

「ありがとうございます、そんな技術があるんですね。ぜひお願いします。」と佐羽陽向にメッセージを送った。

割れたティーカップを佐羽陽向の工房に送ってから三週間後、金継ぎされたティーカップが届いた。

しっかりした厚みのある箱を慎重に開け、丁寧に薄紙に包まれたティーカップを手に取り、じいっと見つめた。

「きれい……」

割れた部分を金でめぐっている。私は指で金のすじをなぞり、胸があたたかくなるのを感じた。壊れたら終わりじゃない。このティーカップのあたらしい物語がここにある。

この傷は、このティーカップだけのもの。

「あれ」

ティーカップが入っていた箱のとなり、小さな箱があるのに気づいた。封筒も添えられている。

「先日は間違いメールを届けてくれて本当にありがとうございます。今は授賞式に向けてスピーチ原稿を考えてます。たいせつなティーカップをぼくに任せてくれてありがとうございます。一生懸命直しました。それから、ささやかですが、感謝の気持ちを込めてサナさんにプレゼントを贈り

ます。気に入ってくれると嬉しいな！ 佐羽陽向」

ふふ、と私の口元がゆるむ。水色の箱を取り出して開けてみると、きらりと輝く鳥のブローチだった。

「かわいい」とつぶやき、裏を見るとsky is the limit! from saha to sanaと彫られてある。胸がドキドキする……。こんな気持ち、はじめて。

「いい顔してて安心したわ」

その日の午後、会う約束をしていた私のテニスの元コンディショニングコーチのナオミがソファに座って言った。

「心配してくれてありがとう」私は紅茶のカップをナオミに渡しながら言う。壊れたら終わりじゃない。それに気づかせてくれたのは、佐羽さんだ。あれからずっと、佐羽さんとのメッセーجزのやりとりは続いている。

「直ってよかったね。そのカップ、はじめて出場したアメリカのテニストーナメントで勝った時の記念だったよね」ナオミが私のティーカップを見て言った。

「うん」私は頷いて言った。「まだ十六歳だった」

「はじめてサナに会った時のこと、覚えてる。留学初日でたどたどしい英語がかわいくて、目がきらきらしてて、一生懸命で」ナオミがテーブルに置いたチョコレートをひとつ、口に入れ

てふふと笑う。それから探るように聞いた。

「ねえサナ、新しいことやってみない？」

「新しいこと？」

「うん。私、二か月後にはアメリカに戻るの。それでサナも一緒に来ないかなって思ってた。どうかな」

「ナオミと一緒にコンディショニングコーチをするってこと？」私が難しい顔をしながらかくと、ナオミは首を振った。

「違うの、テニスじゃないこと。でも、サナの特技が生かせると思うんだ」

「テニス以外に、私の得意なことあったかなあ」と言う私に、ナオミは「あるあるあるある！」と、楽し気に話しはじめた。

二か月後の今日、私はニューヨークにいる。

姿見でおかしなところがないかチェックする。青いワンピースの胸元に鳥のブローチをつけて、髪は夜会巻にしてまとめた。

「うん、完璧、かわいい！」鏡に映る自分をほめちぎって魔法をかける。

ロビーに到着すると正装の紳士が少し緊張気味に立っているのを見つけ、私はふう、と呼吸

を整えて彼に近づく。

「こんにちは、佐羽陽向さん！ 通訳の鳥山咲菜です」目が合い、私はほほ笑む。

「こんにちは。え、サナさん？」

「はい、佐羽さん。会いたかったです」

「ぼくも！ ぼくもサナさんに会いたかった。まいったな、こんなに綺麗な人だったなんて。ブローチつけてくれてありがとう」

佐羽さんが耳まで赤くして言った。ああ、なんてかわいい人なんだろう。私は目の前にいる愛しい人の手を取って言った。

「佐羽さんも最高にかっこいいです。さあ、授賞式に行きましょう！」

つないでくれてありがとう。次は私があなたと世界をつなぐ。

きっと世界中の人があなたの作品に恋をする。



近松 賞 平山 美帆

しばらく続いた雨も止んで今日は良いお天気。こんなぬけるような青空だし、公園まで散歩にでも出ようかと思いつく。娘も結婚し家を出て孫も出来、主人が亡くなってひとり暮らしようになってから、理由もなく出かけようと思うのは初めてかもしれない。

なのに、出かけようと思ったら眼鏡がない。せっかくの気持ち台海無しにするのももったいなくて、ふと主人の眼鏡を借りていこうと思いつく。確か度数も似たりよったりだったはず。もちろん、サイズは大きすぎるが、ちよつとした散歩くらいなら無いよりはましかもしれない。すぐに主人の筆筒からひっぱり出してかけてみる。と、ふと、室内がふわあつと、あたたくゆつたりな景色に見えた。気のせいか、とは思ふものの、あの人のゆつたりと優しい気持ちが眼鏡から伝わってくるのかな、とも思う。室内を見渡していると、いくつかの場所がふわあつと明るく、春のひだまりのように輝いて見える。確認すると、高い棚の上のものをとるための足踏み台、小さいスパイス瓶をいれるための棚、ちよつとしたものを置ける飾り棚・・・といったところだ。なるほど、生前の主人が自分で作っていたものばかりである。手先の器用な人で、ちよつとした家具を作ったり修理したりはお手のものだった。そもそも主人が生まれたこの町、鯖江は技術者の集まる街だったんだと、よく言っていた。だからこそ、今でも漆器や織

維類、はたまた医療機器にいたるまで、技術を必要とする産業が盛んなのだそうである。私は鯖江の生まれでは無かったが、主人の影響なのか今では物を作る事が好きである。家具作りなどではないが、縫物や編み物をしている時が自分の一番好きな時間である。そうやって熱心に何かを作っている時は必ず、主人の言っていた言葉を思い出す。「使う人の事を考えて考えて、そして作る、これがいいものを作ることで一番の方法なんだ。誰かを一心に想う。その間の自分はとても幸せだしね。」確かにその通りで、誰かを想う時間は幸福の時間である。

今はひとりで暮らすようになり、さみしくなった家だと思っていたが、主人の作った物にこんなに優しく見守ってもらっていたのかと思いながら、ようやく家を出る。公園まで続く道の緑の木々や花々もキラキラと見える。あの人が見ていたこの街はこんな風にみえていたのかも知れない。なんとなく、この眼鏡がそう見せてくれているようにも感じる。そのまま公園まで歩くとなぜか砂場の方がキラキラとして見える。眼鏡がそちらに歩かせようとしているかのようだ。不思議に思いつつも、眼鏡がいざなってくれているような気がして、そちらに向かって歩いて行き、砂場が見えるベンチに腰かけてみる。

これほどお天気が良いと、さすがに多くの子供たちが遊んでいる。ふと目を向けていた砂場の方から男の子がひとり、私に向かって歩いてくる。孫娘よりは大きいので、幼稚園へ通っているくらいの年頃かしらと思う。

「めがねのおじいちゃんめがねだねー！おじいちゃんは？」

眼鏡のつるの部分に葉っぱのようなデザインのある特徴的な眼鏡のせいか、主人の眼鏡と気づいたようだ。

「え？あ、えーっと。この眼鏡のおじいちゃんは・・・。」

言い淀んでいると、男の子は勝手に話し出す。

「ほらほら、これつくってくれたおじいちゃん！」

と、手には木で作られた列車のおもちゃを持っている。

「なんでも自分で作ればいいんだよー、おじいちゃんが作ってくれたよ。」

と言って、砂場で遊ぶ様子を私に見せてくれる。汽車の各車両は、砂場の砂をぎゅっと詰めてひっくり返すと丸や四角、ハートなど砂がいろいろな型になって出てくるようになっていく。

各車両は連結出来て汽車としても遊べるようになっていく。たしかに、自宅の庭でなにやら木で削ったり、細工したようなものを作っていると思った事があつたがそういうことだったのか。

「みんなでこれで、遊んでるー。それでね、それで・・・。」

私の返事はおかまいなしにどんどん話しかけてくる。

「僕のスマホー！見てみて！おじいちゃんに教えてもらいながら、じぶんで作ったよー。ねー、ねーっ。」

なるほど、お菓子の箱と折り紙で作られたスマホらしきものをふたつ持っている。

「眼鏡のおじいちゃんに教えてもらったの？」

「そう！なんでも、自分で作るの、楽しいよって。作るのも、できあがりも。ほしいものがあつたら、一度自分で作ってみよう、ってさ。むずかしかったら、おじいちゃんが手伝ったあげるよー、って。」

「見せてもらってもいい？」

「いいよー。」

お菓子の箱に折り紙をはって、スマホ画面のようにして作つてある。赤い箱と青い箱、ふたつの愛らしいスマホ。その画面には、なにやらアプリのアイコンらしきものが色鉛筆で書いてある。パパやママのスマホを真似ているのだろう。

「あ、電話だ！眼鏡のおばあちゃん、電話が鳴ってるよー。」

見せてもらつていた赤い方のスマホに電話がかかってきている、という事らしい。少しあわてながらも赤いお菓子の箱のスマホを自分の耳にあてる。

「はい、もしもし・・・。」

少年がじいっと、興味深々の様子でこちらを見ているので、きちんと電話に出ているように答える。孫はまだまだ赤ちゃんなので、これくらいの歳の子供にはどう相手したものかとオロオロしている、またおかまいなしに少年が話し始める。

「はい。もしもし。眼鏡のおじいちゃんです。」

目の前の少年が青いスマホに耳をあてて答える。どうやら、自分が眼鏡のおじいちゃんになりきって私に電話をかけてくれているようだ。

「あつちにいくから、ちゃんと電話でお話してね！」

少年は青いスマホを耳にあてて、なにやら遠くへ走っていく。電話なので、離れた距離で電話しよう、という事らしい。あんなに可愛らしい顔でそんな事を言われたら、電話をするしかない。あまりの微笑ましさに、赤いお菓子のスマホを耳にあてて、ひとりで話はじめる。

「もしもし。聞こえますか？あなたとこうしてまたお話できるなんて思ってたんです。あなたのお友達のとつてもかわいい少年のおかげですよ。」

思わず表情がゆるむ。少年はまだトコトコと走っていく。

「もしもし。このスマホとつても上手ですね。これならどこへでも電話ができそうですね。・・・今日はとてもお天気で、お散歩しようと思ったら眼鏡がなくて、あなたの眼鏡をかけてきたの。おかげであなたの小さなお友達に出会えました。」

すっかり遠くまで行った少年は、木の陰で青いスマホを耳に当てている。私のスマホに電話をしている、という事であろう。

「あなたが見ている景色はとても綺麗でした。緑の青も、お花もつやつやして。穏やかなあなたの見る景色。いつもせかせかしている私と違ってとても素敵でした。あなたはいつもゆとりとしていて、優しく私を見守ってくれていたんですね。」

本当に話をしているような気持ちで心がじんわりと暖かくなっていた。

「もしもし。・・・あなたとはなしたい、と思いながら、実際話せる、となったら何を話したらいいかなんて分からないものですね。・・・、あなたの優しさに、・・・いなくなつてから気づくなんて・・・。また、・・・もしまた生まれ変わったら、私と出会って、結婚してくださいね。・・・あなたにもう一度・・・会いたいです・・・。」

だめだ、と思ったが涙がこみあげてくる。目の端に少年が、ちょこちょこと、走ってこちらへと戻ってくるのが見える。急いで目じりを拭う。

「おばあちゃん・・・おじいちゃんと、電話、できた？」

ふうふう、と少し息を切らしながら少年が尋ねる。

「・・・ええ、ええ。電話、上手に作ったね。おじいちゃんとたくさんお話できたよ。」

「今ね、たつた今ね、僕の電話にもおじいちゃんからかかってきたよ。でね、でね、おばあちゃんに言い忘れてたこと、つたえておいてほしいー、って。」

「ん？何を？」

「だいすきだよー、って。いーっぱいだいすきだよーって。」

「・・・あ、あの、あ、ありがとうね。本当にありがとう。」

思いがけず涙がこぼれる。驚いた顔で少年が答える。

「あ、ごめんね。やっぱり電話、途中でこわれちゃったのかな・・・？」

故障したせいで泣いたのかと思ってくれたようだ。

「そんなことないの。電話はとても上手にできてたの。あんまりすぐくて感激してしまったの。本当に上手ね。」

といって赤くてかわいらしいスマホを少年に返す。

「次は、もっといっぱいお話できるやつ、作ってくるからね。」

「まあ！それも、とっても楽しみにしているわね。今日はありがとうね。いろんなもの、また作ったら見せてね。またね。ありがとう。そろそろおうちへ帰るわね。」

あの人の見える世界を楽しみながらの散歩は、とても楽しいものだった。気づけば、いつもよりたくさん距離を歩いていた。ようやく家に着き、ふと、処分しようと思っていた眼鏡だけれどもしばらくとおこうか、と考え直してみる。あの人の愛するものをキラキラと見せてくれる大事な眼鏡だし、あの少年もこの眼鏡じゃないと私と分らないかもしれない。あれこれ考えながら、もともと眼鏡をしまっていた筆筒をひらく。ふと、こちらも処分出来ずにとっておいた、ニットのカーディガンが目に残った。驚くほど優しい光はなあって。それは、ひと針ひと針、気持ちを込めて、私が主人へと編んだ、ニットのカーディガンだった。

「林檎がなったら」

西村 一江（山口市）

「大きくなったねえ。」

幸恵は、よいしょ、としやがみこんで、艶々した緑の葉に触れた。葉をいっぱいにつけた枝が、三本にも分かれて風になっている。まさか、こんなになるとは思わなかった。

頂きものの林檎を食べた夫が、その種を庭の山椒の横に植えているのを見て、幸恵は冗談で言ったのだ。

「林檎がなったら食べさせてね。」

「うん、最初になったやつをあげる。」

夫は素手で土を押さえながら、請け合った。

二週間で可愛らしい芽が出た。夫は大喜びだった。三十センチくらいの高さに伸びた頃、夫が亡くなった。

林檎の若木は今、一メートルくらいにもなって、隣の山椒を見下ろしている。幸恵はゆっくりと立ち上がった。

夫は毎日林檎の前にしゃがんで、葉に触れたり話しかけたりしていた。その姿をしっかりと覚えてる。

幸恵は背中を伸ばして、塀沿いに咲いている青い紫陽花を見つめた。夫がいなくなつて、もう二年が経つ。平穩に暮らしているが、自分が、何かから目をそむけて生きている気がしていた。

ある日の夕方、テレビで独居老人の孤独死が増えているというニュースを幸恵は見た。

「あらやだ。」

そう独り言を言つて受け流そうとしたが、心に引かかつてしまつて離れない。夕食の後片付けを終えて、さあお風呂に入ろうと思うのだがいつものように身体が動かない。

「どつこいしょ。」

と、またリビングの椅子に座つてしまった。夫が座つていた椅子に目がいく。心がグラツと揺れた。自分は八十歳、独居老人だ。徐々に老いていき、弱り、寂しく独りで死ぬのだろうか。不安でたまらなくなつた。娘に電話しようかと思つたが止めた。一人娘は、東京で働いている。煩わせたくない。

夫がいてくれたら、こんな気持ちにはならないだろう。もつと話をすればよかったと今になつて思う。夫は晩酌が日課だった。幸恵は後片付けをしていてつき合つたことはない。後片付けなんか後回しにして、一緒に吞めばよかった。

そういえば、晩酌のお酒、残つていたのではないだろうか。幸恵は思い出して、食器棚の下

の開き戸を開けた。

あった。大切そうに金色の箱に入れてある。幸恵は金色のラベルをあしらったスリムな酒瓶を取り出した。「梵」の文字が目に入った。

そういえば、夫がよく言っていた。「ここ鯖江の地酒、梵のゴールドが、一番だ。」

瓶にはまだ、半分くらい残っている。心がキュッと痛んだ。呑むつもりだったんだね。

幸恵は、夫が使っていた小さめのガラスコップに「梵」を三センチくらい注いだ。ふわっと、甘い香りが漂った。

少し口に含んで、あらっ？と思った。すぐくやわらかな味なのだ。予期していた日本酒独特のツンとした感じがらない。

「ああ、美味しい。」

思わずつぶやいて、呑み干した。日本酒を呑むのは、若い頃以来だ。身体がぼっと熱くなった。徐々に心が軽くなっていくようだ。

幸恵はその日から晩酌を始めた。コップ三センチと決めて呑む。軽く酔う程度でちょうどよい。

しかし、晩酌が外せない日課になった頃、酒瓶が空になってしまった。いつも利用するスーパリーの斜め向かいに酒店があるのは知っている。そこに買いに行くことにした。

シニアカーを押して、幸恵は家を出た。靴は、腰痛軽減用の底の厚いスニーカーを履いている。財布を入れたショルダーバッグは、肩に斜め掛けにしている。

スーパーを通り越し横断歩道を渡って、古い構えの酒店の前に来た。澤田酒店だ。きっと、夫もこの店で酒を買っていたに違いない。

引き戸を開けると、チロチロリーンと、風鈴のような音がした。敷居の段差にシニアカーの車輪を取られて立往生していると、

「おっと、大丈夫ですか。」

という声がして、逞しい腕がシニアカーを救出して店の中に入れてくれた。

「ああ、すみません。」

幸恵が顔を上げると、日に焼けた男性の顔があった。角張った顎で、眉は太い。目は笑って細くなっている。

あらま、素敵なこと。いくつになっても、感じの良い男性を見ると心が弾む。齢は、娘と同じくらいだろうか。

「あの、梵が欲しいんですけど。」

「梵ですね、色々種類がありますけど、どれにしましょうか。」

「ゴールド、ありますか。」

男性の顔が、ぱっと輝いた。

「ゴールド、僕も大好きですよ。」

そう言う、彼は棚から金色の箱を手にとって幸恵に見せた。

「これですか。」

家にある箱と同じだ、幸恵はうなずいた。

「亡くなった夫が好きだった銘柄です。」

「ひよっとして、小笠原さんですか。」

「ええ。」

「そうですか。いつも、梵のゴールドを買って行きました。」

お金を支払うと、男性は、

「これ、中に入れましょうね。」

と言って梵の箱をシニアカーに入れてくれた。

梵が残り少なくなると、幸恵は澤田酒店へ買いに行つた。酒を買うこと自体も楽しみだが、店主の男性に会うのも嬉しかった。息子がいたらこんな風なんだろうかと、つい想像してしまふ。

ある時、彼は思い出すように言った。

「そういえば、ご主人に、林檎に合う銘柄があるか聞かれたことがあります。庭に林檎の種を植えたから、実がなったら当てにして奥さんと吞みたいと言われて。」

ちよつと、シュンとしてしまった。そんな話、聞いたことなかったのだ。

「ああ、すみません。」

店主は、悪い事を言ったかと申し訳なさそうな顔をしている。幸恵は笑顔を作った。

「林檎に合う日本酒は、あるんですか。」

彼はほっとした表情になった。

「スパークリング系が合うと思います。これなんかお勧めですよ。」

そう言うのと、レジの後ろの棚を指さした。

「プレミアムスパークリングです。少し、お値段が張りますが。」

店主は、また申し訳なさそうな顔になった。

「年金をこつこつ貯めて買いますよ。」

人のいい店主の気持ちを軽くしようと冗談で言ったのに、彼の表情は曇ったままだった。

幸恵の娘の春菜は思案していた。両親とも亡くなった実家をどうしよう？やはり、手放すしかないのだろうか。

家の中は、主が亡くなったとは思えないほど、生活の匂いが残っている。台所の物干しに掛けられた皺の寄った布巾。すり減ったたわし。台所に立つ母の丸い背中が目に見えかぶ。父が亡くなった後、母は七年半この家で暮らした。東京のワンルームマンションに呼び寄せることも

できず、一人暮らしをさせてしまっていた。

「独居老人の孤独死、なんて言うのは失礼よ。自立死、と言ってちょうだい。」
気丈な母の言葉に、つい甘えていた。母が好きだったのに、滅多に帰らなかった。

早くに離婚して一人で生きている娘を心配している気持ち、負担だったのだ。母は急に亡くなってしまう、胸に抱えている想いを伝えることもできなかった。

寝室の鏡台には、両親の若い頃の写真が飾られていた。海辺で撮られていて、春菜は見たことがないものだ。二人とも、何て幸せそうな顔をしているのだろう。

写真の前に、酒瓶が置かれていた。プレミアムスパークリング純米大吟醸、の文字がある。封は切られていない。きっと、澤田酒店で買ったものだろう。

胸の奥に、小波が立った。東京での仕事を選ばなければ、どうなっていただろうか。ずっと避けていたことに、思いが及んだ。

鏡に映った自分を見た。顔色は冴えず、白髪も目立つ。あの頃と、容貌はだいぶ変わってしまった。心の中は、滑稽なほど変わっていないのに。

春菜は庭に出て、歩いた。四月末の午後で、暖かい。甘ずっぱい香りに、ふと足を止めた。眼の高さに、白い小さな花を咲かせた枝が風に揺れている。可憐な花が、勇気をくれた。

春菜は家に入って鏡台に置かれた酒瓶を抱え、澤田酒店に向かつてぐんぐん歩いて行った。店の引き戸を開けると、チロチロリンとベルが鳴った。はたきを手にした店主が振り返った。

「このお酒、母が買ったんですね。」

春菜は酒瓶を突き出して訊いた。彼の日に焼けた顔が、くしゃくしゃになった。

「はい・・林檎がとうとう蕾をつけたから、実がなったら当てにして呑むんだと・・。」

春菜はらつむいて、酒瓶を胸に抱き締めた。

「僕は、あれからずっと、独り身です。」

静かな声が聞こえて、春菜の心いっぱいに、さつき庭で見た白い小さな花がうねる様に大きく揺れた。

林檎がなるのが、待ち遠しくなった。

強烈な眠気に打ち勝ち、コーヒーマーカーをセットする。トースターにパンを入れて、バターをひっかけナイフの上に乗せておく。

質素な朝食だが、バターもどきは使わないと決めている。旬(しゅん)がそうしていたから。

焼き上がったトーストにバターを乗せ、溶けていく様(さま)を見つめながら回し塗る。

向かいの空っぽのイスをぼんやり見ていると「碧(あお)。はい、コーヒー」という旬の声が聞こえた気がしたが、ズシューツという蒸気温に、妄想は打ち消された。

サクッ

自分の咀嚼音でテレビの中の人の会話が聞こえなくなった。

でも、それはどうでもいいこと。私の頭の中は、何日も同じことに支配されているから。

食事を終え、姿見で全身をチェックする。

肩甲骨あたりまで伸ばした髪は、バナナクリップでとめる。緩くパーマをかけてあるので、丸まった毛先がふわつとなるのが気に入っている。

六月で三十五歳になったが、メイクはわざと派手にしている。顔に視線が行くように。

歩き回る仕事なので、季節的に半袖ブラウス一枚ですませたいところだが、シフォン生地のマージャケットを羽織る。下は膝下丈のベージュのスカートにピンヒールと、スマートにキめるつもりだが、ウエストはゴムだ。

下腹が、異様に張って、膨らんできている。

たぶん、妊娠している。

これが初めてじゃ無いし、月のモノはアプリで管理しているからわかる。

でも、誰にも知られはならない。

産む決断ができていないから。

私が二十七歳の時、まだ幼かった娘を事故で亡くした。幸せな生活は一変し、夫とは離婚した。大切な思い出さえも封印された過去になった。

そして私を取り巻く全てにお別れし、故郷の鯖江から一人で東京に移り住んだ。

それ以来鯖江に帰る事はできなかったが、ノスタルジーにかられた時には、時々ふくいアンテナショップに行っていた。

サングラスを手にとった時「それ、素敵でしょ。鯖江は日本一の眼鏡産地なんですよ」と、懐かしいイントネーションで話しかけてきたのが、旬だった。

「メガネ堅パンが美味しいのも知ってます。鯖江市出身なんで」と、サラツと言えた自分に驚

いた。

ずっと福井を避けていた。だけど、訛りの残る言葉の心地よさは、私を素直にさせた。

転勤で東京に来たばかりの二十八歳の旬と、東京でひとりぼっちだった三十二歳の私はすぐにお互いを求め合った。

週末はいつも一緒にいた。散歩のついでに買い物したり、二人で電車に乗ったりと、なんでもないことが楽しかった。三年が過ぎ、旬が福井に戻るようになった。機が熟していたことはわかっていたが「碧、結婚しよう。一緒に福井で暮らさないか」という言葉に、私は凍り付いてしまった。

思い猶豫(たゆた)う、という言葉が一番しっくりきていた。離婚歴があることは話したが、娘がいたこと、鯖江に帰れない理由、愛しているのに結婚を躊躇(ためら)う気持ちを、どう伝えればいいのかわからなかった。

私の顔は、よほど険しかったのだろう。旬は「喜んでくれると思ったんだけど、僕の思い違いだったのかな」と、私に背を向けた。

あれからまだ三ヶ月しか経っていないのに、もう何年も過ぎた気がする。今はもう連絡もとっていない。

旬と結婚しなかった。でも、子どもはもう持たないと、娘を亡くした時に自分に誓った。私の

所に産まれてくる子は、きっと幸せにはなれない。

妊娠が怖くて諦めた恋だったのに、今さら連絡なんてできない。

冷めきった最後の一口のコーヒーを飲み終わると、テレビが八時を告げた。ローファーに一瞬目が行ったが、いつも通り七センチの細いヒールの靴を選んだ。

リズムカルにカツカツと鳴る靴音が「か・み・さ・ま・の・い・う・と・お・り」と聞こえてくる。

妊娠に気付いてから、通勤途中に地下鉄の階段を駆け下りる時、もし足を滑らせて転がり落ちたらお腹の子の命の行方は私が決めなくては、という考えが毎日頭に浮かぶ。

そんな風に思ってしまうのは、きつと封印が解けてきているからだ。旬の子どもがお腹にいることを嬉しいと思っではいけない。命を守ってやれなかった娘に申し訳ない。

心の中で葛藤するたび、全身が縮こまる。

仕事中はわざと忙しくして、忘れるようにしているが、もうそんな余裕はなくなってきた。

私の計算が正しければ、今日で妊娠一四七日目。あと一週間もしないうちに、産むという選択肢しなくなる。

今日も一日、無事に過ごしてしまった。

ひどく疲れた。

帰宅して無傷のピンヒールを脱ぎ、玄関に座り込む。

「何で私のところにきちゃったの。私にどうしろって言っの」

やり場のない思いと言葉を口にして、後悔する。下腹がきゅーっと締め付けられ、鈍く痛んだ。

その時、微動を感じた。

「えっ」

胎動だ。

心の中に閉じ込めていたモノたちが崩壊し、おろおろ涙がこぼれた。

娘の手の温もり、笑いながら「ママ」と私を呼んだ声、抱きしめた時の匂いが体の中を駆け巡った。あの娘も確かにここに居た。

「匂、会いたいよお」

私の中に、あなたの子がいます。たぶん。

匂に会いたい。今から帰ります。

十七時半、携帯電話にメッ

セージを送り、私は品川駅へと向かつ

た。北陸新幹線なら乗り換え無しで早く着くらしいが、どうしても東海道新幹線で福井へ帰りがかった。

東京に来た時と同じ道を辿れば匂に会えるかもしれない。根拠のない願掛けに頼った。

それでもどこかに迷いがあつたのだろうか。私は無意識にピンヒールを履いていた。

十九時前、車窓から富士川にかかる水道橋越しに、富士山が見えた。六月も半ばになると、この時間の太陽はまだ西の空の下の方に残っている。山頂にうつすら残る雪が夕日を受けてオレンジ色に見える。

「きれい」

東京に行く時の富士山の様子は忘れてしまったが、この光景に励まされたことは覚えている。少しだけ気持ち前向きになれたので、匂に送ったメッセージを確認してみたが、まだ未読のままだった。

二十時、米原駅で特急しらさぎに乗り換えると、気持ちがざわめいてきた。窓から見えるのは街灯だけ。黒い窓ガラスに映る私と目が合わないように、視線を逸らす。

もうこの電車では、福井まで帰れない。敦賀で乗り換えるなんて初めてだ。乗り換えなんて東京ではしょっちゅうしているのに、なぜだか緊張している。

急に自分は妊婦なのだと、自覚してしまったせいかもしれない。

吸った息を震えながら吐き、送ったメッセージを確認したが既読が付かない。拒否されているのかな、という思いが頭をよぎる。

終点、敦賀駅でハピラインに乗り換える。真新しい駅、知らない電車に戸惑いを感じた。変わらないものは無いんだと、見せつけられた気がした。

ここから四十分程で実家のある鯖江に、鯖江から十五分程で旬が暮らす福井に着く。

北陸トンネルに入った。わざと欠伸をして、耳抜きをしないと、鼓膜が空気圧に耐えられない。欠伸ついでに、涙が出た。

次は武生だと車内アナウンスが流れた。もうここまで来たら福井で降りるほかない。福井に着いたら、どうしよう。実家に連絡するにも、このお腹では勇気がある。

もしかしたらとメッセージを確認した。既読がついている。

息が上がり、手が汗ばむ。どうしたらいいんだろう。

ためらう間もなく、着信が入った。旬だ。

何を話せばいいの、混雑している車内で通話していいの、と変な焦りでまごつく。でも、今話さないと一生後悔する。

「旬、わたし」

「碧、今どこ？」

「えっ、もうすぐ鯖江」

「そこで降りて！」

「鯖江で？」

旬はひどく慌てているようで、いつもより声が荒く、大きい。

「そう！ でも、慌てないで、気をつけて」

そこで通話が切られた。私は大粒の涙を瞳にため込んで席を立ち、扉へと向かった。鯖江駅に降り立つのは、ここを出て行つて以来だ。

改札を出るとすぐ、匂が駅に駆け込んできて、私を抱きすくめた。

「もつとはよ言えや」

「言えんかった。ごめん。実は、私には」

と、私は娘のことを打ち明けようとした。

「今、言わんでいい。一生かけて聞くわ」

匂はそつと私の手を握り、お腹に当てた。

私は匂の匂いを思い切り吸い込んで、ピンヒールをそつと脱いだ。

繋いだ手の温もりを、膨らんだお腹に感じながら。

「ソーダみるくばあ」

永池 千鶴子（坂井市）

右後ろ肩をコンコンと叩かれ目が覚めた。

ハツとして振り返ると後ろの席で小松がにやりと笑いペンで前方を指差している。前列から用紙が配られている途中だった。首を小刻みに振って正気を取り戻すと、何食わぬ顔で前から用紙を受け取り一枚取って小松に回す。危なかった。もう少しで前の人に寝顔を見られるところだった。恥ずかしさで耳が熱くなる。古典の須田先生のつぶやくような講義は睡眠導入剤よりも効果的だ。

「覚^{かけい}さん、いい夢みれた?」

授業が終わると後ろから小松が小声で話しかけてきた。何がそんなにおかしいのかニタニタと感じが悪い。小松^{こまつなおと}直登。この春、高校一年から同じクラス。小柄で陸上部。社交的で冗談を言って、よく周囲を笑わせている。

私とは真逆だ。小松の声が聞こえないふりをして鞆の中身をゴソゴソ掻き回す。

「いやあ、寝顔可愛かったな」

「は? 後ろから見えるわけないでしょ。つか寝てませんけど」

「いびきも凄かったな」

「はあ!？」

思わず出た大声で周囲の視線を浴び、背中を締めコソコソと足早に教室から出る。

―最低。

肩で大きく溜め息をつく。窓から降り注ぐ夏の白い日光に目を眩ませながら、生徒でごった返す賑やかな廊下を後にした。

転勤族で小学校は何回も転校した。『^{かけいむっは}算六葉』と名前を黒板に書かれる恥ずかしさは何度経

験しても慣れない。中学時代、転校はなかったが本当の親友と呼べる人はいなかった。仲良しの友達を作っても、どうせまた離れてしまふ。寂しさから自分を守る為に相手に深入りしなくなった。相手をもっと知りたい、私の話も聞いて欲しいという感情に蓋をした。

人間関係が上手く運ぶよう、愛想笑いだけが得意になった。周りは最初、転校生の私に興味本位で話しかけてくる。そのうち、自分の話をしない、ただ笑うだけの聞き役の人間と分かった。皆、私から離れていった。休憩時間は独りでいる方が、かえって気楽だった。

―算さんって彼氏いるの？

―算さんタイプなんだ。

席替えで一番後ろになった小松は前の席の私にやたら絡んできた。小松のような、調子良く初対面でもいきなり距離を縮めてくる異性は苦手だった。小松がしつこくアピールしてくれば

くるほど気持ち悪く、嫌悪感が増した。無視して相手にならないようにした。

「俺に冷たい筈さんもいいね」

聞こえるような小松の独り言。

何、この人？ 完全に小松に引いていた。

そんな小松と私が、クジ引きで各クラス数人いる文化祭の実行委員に選ばれた。実行委員は秋に開催される文化祭に向けて二か月前から準備を始める。各自担当が設けられ、気疲れで逃げ出したい私にも容赦なく課題が次々と与えられた。出し物の衣装担当になり、夏休み期間も教室で衣装作りをした。

その日、いつものように実行委員の串田さんと衣装を縫っていると突然、小松が現れた。

「よっ、お手伝いに来ました」

紫色の委員オリジナルTシャツを着て、黒く焼けた顔の汗をタオルで何度も拭^{ぬぐ}っている。串田さんが大きな目をもっと見開いた。

「何よ、どうしたの？」

「いや、俺、実は手芸大好きなんだよね。おっ、この服いい感じじゃん。なるほど」

ポカンとする串田さんと私をよそに小松はハギレを取ると、仕上がった服を参考にしながら空いているミシンを使い縫い始めた。

「部活、早く終わったし、文化祭の準備も今日は俺の方無いから」

小松は織子のように自然な動きで手際よくミシンを扱っていた。変な奴、と笑いながら串田さんは小松に衣装の説明をした。以来時々、小松は衣装部に顔を出すようになった。

八月半ば、この日、小松は来なかった。

串田さんと委員の梶さんの、手を動かしながらのいつものおしゃべりが始まる。

「小松君のおかげで衣装一気に進んだね」

「あの人、すごいよね。他の準備も手伝ってるんだって。部活の合間に顔出してるって」

「聞いた。物品の他に、先輩と広報のビラ配りして、ステージ企画も。働きすぎだよね」

「実は、ただの目立ちたがり屋じゃないの」

アハハと互いにあざ笑う。

「ねえ、俺さんもそう思うでしょ」

笑いが止まらない串田さんは腹を押さえて

こっちを見た。何も言わず愛想笑いで返す。

つい、作業の仕上げに熱を入れすぎ、いつもより帰りが遅くなった。資材置き場から物音がして、覗くと小松が独り片付けをしていた。誰かが出したまま帰ったのだろう。

「そのまま置いておけばいいんじゃない。何であんたがするの？ 頼まれたの？」

入口で叫ぶと小松は首を左右に振り、もうすぐ終わると返事がきた。

おかしい。やりすぎだよ。理解できない。

七時をまわっていたが外は明るかった。自転車で校門まで来ると、小松のチャリが追いついてきた。背中に声が運ばれる。

「一緒に帰ろ」

私は何も言わずペダルを漕いだ。コンビニに近づく和小松が私を追い越し、ちょっと待ってと店へ入っていった。ソーダバーアイスと練乳バーを手に出て来た。どっち？ と聞かれ練乳を取ると納得した仕草でソーダバーを頬張っている。日中の暑さは衰えることがなく湿気を帯びた熱が体中に絡みつく。建物の隅に二人並んで、瞬く間に形を変えてゆく氷菓に必死にかじり付く。モヤモヤした感情を投げ掛けてみた。

「何で人の分まで掃除してんの？ おかしいよ。良い人ぶってるの？」

「ぶってないよ。誰かがやらないといけない

こと、俺がしただけ。それだけ」

「いや、それ格好つけてるつもり？」

「……俺、親の仕事で転校ばっかしてたんだけ」

小松の言葉にドキリとして横顔を見る。

「……転校で皆と別れて寂しくなかった？」

「寂しいに決まってるよ。それに……ずっと孤立してた。転校先ではグループが出来て上手く入れなかった。俺だけ体操着の色が違う。言葉が違う。居場所がない」

そうだ、と小松は鞆から何かを取り出した。

「これ、あげるよ。俺が作ったコースター。渡すタイミングなくて、ずっと持ってた」

猫が描かれた紙袋に、青系と黄色系の縦模様をした素朴な風合いの四角い布が二枚入っていた。四隅が奇麗に手縫いしてある。

「小さい頃から夏休みは鯖江の婆ちゃん家で過ごしたんだ。婆ちゃんから手芸教わった。鯖江の石田縞だよ。木綿の縞織物で、一度、途絶えたけれど有志が復元させたんだ。草木

染めの糸を使っていろんな色を出したり、竹(ちく)紙(し)の糸を織り込んで縮みを少なくしたり。手間と時間をかけて手織りしている。石田縞が好きな婆ちゃんから布もらって作った」

「何でアタシに？」

「俺のマルチな才能をみせてやろうと思って」

「ふうん」

「婆ちゃんが言った。『織物は経糸たていとと緯糸よこいとで繋がってる。交わらなかつたら一本の糸のままや。人もそつや。人と関わらなくちゃあかんよ』って」

「……」

「俺、止めたんだ。閉じこもるの。自分で居場所作ることにした。動いて、皆の手伝いをする。」

糸のままで終わらない。ピンと張った経糸に緯糸の俺が手前に行ったり向こうに行ったり。布を作るんだ」

小松が楽しそうに笑った。

「布を作る……」

コースターを見た。一本一本糸を紡ぐ職人と、端を器用に縫う小松。息遣いや体温が伝わる。凍りついた心にふわりと毛布を掛けられた気がして、いつまでも布を眺めていた。

家に帰ると、母がいつになく神秘的な顔で話しかけてきた。

「おかえり六葉。ちよつといい？」

何、と大量の氷を入れたコップに冷水ポットの麦茶を勢いよく注ぐ。

「お父さんね、転勤決まったの。来年、年が明けたら」

コップから麦茶が溢れ我に返る。母が慌てて布巾を取りに走った。

「……行くよ、アタシも」

「待って。よく考えてからでいいのよ。もう高校生なんだし。単身赴任でもいいのよ」

「行くよ。お父さん一人じゃ可哀想だもん」

お茶を一気に喉に流し込み窒息しそうになる。むせながら穏やかな父の笑顔が浮かんだ。

「あなた、お父さんっ子だもんね。……時間はあるから、よく考えてからでいいよ」

うん、声にならない声を出す。鞆からはみ出た猫の紙袋が視界の端にぼんやり映った。布団に入ったがなかなか眠れなかった。暑さのせいかな。小松のせいかな。転校か。蝉の音がやたらうるさかった。

文化祭が近づいてきた。準備も大分大詰めにかかる。帰り際、資材置き場にダンボールが散乱していた。通り過ぎようとしたが足を止めた。

――小松ならきつと集めるよね。ダンボールを集める自分をフツツと笑う。

あの日から、何故か小松を目で追うようになった。常に小松がいる場所を確認していた。帰りのコンビニの前でソーダバーをかじる小松が私に気付いた。

「寛さあん、一緒に帰ろ」

少しはにからんでから笑顔で答える。いいよ。

ひぐらしがどこかで一斉に鳴き始めた。

「来週は中間テストだからしっかりと復習しておくように——」

教壇に立つ教師の言葉を最後まで聞かず、有定ショータは両目を軽く閉じた。再び目を開くとそこは教室ではなく、ショータの自室だった。

「やっぱりホライズンは切り替え早いな」

ショータは掛けていたVRグラスを取り外して、しげしげと眺めた。ホライズンというのは鯖江市のVRグラスメーカーが手掛けるブランドの一つだ。通常の眼鏡と変わらないデザイン性と通信の速さを両立させたホライズンは若者の間で人気のVRグラスだ。

「さて、今のうちにトイレに行っておくか」

2060年、出生率の低下に歯止めがきかず日本の少子化は加速していった。子供の減少だけでなく、教師自体もその過酷な労働環境から教職を選択する人々は減り続けた。そしてついに学校という形での義務教育の継続は困難な状況となった。

政府は中学校までの義務教育期間を全てVR上で行うことに決めた。当初は反対するデモが各地で起きたが、削減したコスト一部を教員の給与に反映したことで、教職への志願は増え、コロナに次ぐパンデミックもあつた為、感染症対策としてVR教育を望む親たちも多く、反対

の声は自然と消えていった。当の子供たちからも、VR上であれば直接的な暴力を伴うはじめはなく、自由にアバターを設定でき、外見的特徴をからかわれることもない為、VR教育法は大いに支持された。

トイレから戻る途中、ホライズンにクラスのトークグループから、ゲームルームへの招待コードが表示される。シヨータは自室に戻り、片目を2回素早く閉じた。すると途端に部屋は広大な廃墟へと変化した。

「遅せえぞ、シヨータ」

モヒカン頭のアバターでショットガンを持った舟枝カイトが待ちくたびたといった様子で話しかけてきた。

「悪い、ちよつとトイレ行つてた」

ここはVRゲームのバトルフィールド。シヨータは放課後いつもクラスメイトたちと集まってVRゲームで遊んでいた。最近はいびくブルームで古いFPSがクラスで流行っている。

「今日こそ、ランク上げようぜ！」

カイトが掲げたショットガンにシヨータは自分の持っていたライフルを重ねた。

「絶対勝とう！」

ゴングが鳴りゲームがスタートする。

舟枝カイトはシヨータにとっては親友と呼べる存在だった。最近放課後はほとんど毎日カイト

トとゲームをして過ごすことが多かった。

「惜しかったな」

カイトが悔しそうに呟く。ゲームは僅差で他のチームに敗れてしまった。

「なあ、カイトって家どこら辺なんだっけ？」

シヨータはある疑問を口にした。

「西山公園の方だけど、なんで？」

カイトはシヨータの家から、かなり離れた地名を口にした。VR教育法が制定され、学区の概念がなくなった為、同じ学校に通っていても、別の地区の生徒がいることは珍しくなかった。「そういえば俺たちリアルで会ったことなかったなと思ってさ。なあ一度リアルで会ってみたいなか？」

「別にリアルで会っても、遊ぶとしたら結局ゲームするんだから、あんまり意味なくないか？」

「それもそうだよな……」

シヨータは胸の奥で黒い靄のような疑念が深まっていくのを感じた。

「あつ、悪い。なんかカーチャンが呼んでるから今日は落ちるわ。また明日学校で」

「ああ、また明日」

シヨータはゲームからログアウトして、大きなため息をついた。VRグラスから昨日ブック

マークした記事を開く。

『教育現場の闇！ VR教育の真実』

“……我々の調査によれば政府が発表している出生率は改竄されており、実際の出生率はさらに低い。政府がVR教育法を半ば強制的に施行したのは超少子化を隠蔽する為であり、子供たちの数はVR技術で水増しされている。VR学校に通う生徒の半数近くはAーでVR空間に投影された幻に過ぎない”

初めはバカバカしい記事だと思っていたショータだったが、カイトに一度も現実で会ったことがないことに気が付き、急に恐ろしくなってきたのだった。

「カイトがAーのはずがない」

ショータは自分の疑念を笑い話にするため、カイトの家を探すことにした。ショータはカイトの話していた情報を元に、カイトが住んでいると言っていた地域の表札を一軒、一軒確かめて回った。しかし『舟枝』の名字は一向に見つからなかった。

「この辺に舟枝さんのお宅はありませんか？」

ショータは近くを散歩していた老人に思い切って声を掛けた。

「はて？ 私はここに五十年住んでいるが、舟枝なんてお宅は聞いたことがないね」

翌日カイトは学校に来なかった。教師は両親の仕事の都合で、急遽海外へ引っ越すことになったと伝えた。そして間もなくカイトが使っていたSNSやゲームのアカウントが全て削除さ

れた。カイトがこの世界に居たという痕跡は完全に消え去っていた。シヨータはカイトがＡであることを確信した。

放課後。いつもなら直ぐ学校をログアウトして、ゲームをするのだが、そんな気も起きずシヨータは教室で座り込んでいた。

「有定くん、どうしたの？」

シヨータの顔を一人の女子生徒が心配そうに覗き込んできた。

「水落さんっ!？」

眼の前に突然現れた、女子生徒に驚き、シヨータは椅子から転げ落ちそうになる。

水落力ナエは成績優秀で人当たりも良い、クラスの人気者だ。かくいうシヨータも彼女に密かに憧れていた。

「さっきからかなり思い詰めた顔しているけど、なにかあったの？」

「実は……」

そう言いかけたところでシヨータは口を噤んだ。カナエもシヨータと同じようなＡーかもしれないのだ。

「水落さんって家どの辺なんだっけ？」

「阿和田の方だけど、それがどうかしたの？」

「今すぐ、日付が分かるものと一緒に家の表札と住所が分かる物の写真を撮って見せてくれな

いか？」

「え、なんで？」

「頼む、必要なんだ」

カナエは訝しげながらも、シヨータの真剣な様子に気圧されて、表札と近所の電柱の街区表示板の写真を撮ってシヨータに見せた。

「変なことに使わないでよね」

「いや、もうこれで大丈夫」

少なくともカナエはＡーではなく、実在の人間であることが分かった。

「そんなまさか……」

クラスメイトにＡーが紛れ込んでいると、急に言われてもカナエは信じられなかった。

「水落さんも仲良いけど、一度も会ったことのない友達いるんじゃないの？」

シヨータにそう聞かれ、カナエは思わずギクリとした。

「そういえば、ミサキとは一度もリアルであつたことない……」

ミサキはカナエがよく遊んでいるグループの一員だが、みんなで買い物に行こうと誘っても、なにかと理由をつけて、ミサキは参加していなかった。

「こんなの酷い誤魔化しだわ」

カナエは憤った様子で言った。

「そうかな。誰も気が付かなければ、問題なかったんじゃない？」

ショータがカイトの家を調べなければ、カイトがいなくなることもなかった。

「もしも誰か恋をして、その相手がＡーだったらどうするの？ 叶わない恋があるのは仕方がないけど、Ａーであることを知らずに恋して、振られたりしたら可哀想だよ！」

カナエは架空の恋人たちの悲劇に声を荒げた。

「それは確かにそうかもね」

もし眼の前のカナエがＡーだったらと考えると、ショータは胸が苦しくなった。

「ねえ、二人で調べてみない？」

「調べるって？」

「クラスメイトに何人Ａーが紛れているかに決まってるじゃない」

カナエに半ば押し切られる形で、ショータはクラスメイトたちの身边調査に乗り出した。

「しかしクラスの半分がＡーだったなんてね」

ショータとカナエは調査の結果をSNSに投稿した。ネットでの炎上は政府隠蔽工作より速く広がり、政府はついにVR教育上のＡー運用を認めた。

「まさかこんな大事になるとは思ってなかったけど」

ネット炎上は未だ収まらず、VR教育法そのものの見直しまでに議論が及んでいる。

「ねえ、有定くんはAーじゃないんだよね？」

「今さら、それ聞く？」

「いや結局まだ私たちリアルで会ったことないじゃない？」

カナエの一言で、リアルで会うことになった。

弁天橋の向こうから、カナエがゆつくりと歩いてくる。今まで会っていたカナエはあくまでもVR上の存在だ。リアルでの彼女がどんな姿なのか、それはVRグラスを外すまで分からない。ショータはゆつくりとVRグラスを外した。

近松の里 たちまち スタンプラリー

パワースポット + KOIBANAめぐり

※近松の里づくり事業推進会議で作成した冊子を掲載しています。

2013年 近松の恋物語が360年の時を経て現代によみがえる……



近松の里 たちまち スタンプラリー

パワースポット+
めぐり



近松の里
たちまち
スタンプ
ラリー



こちらもアチパワー情報

「苦を抜き、楽を与える」名号岩

●名号岩 (あやうごういわ)

天神山麓の大岩石には、天保13年(1842)に刻まれた「雨無阿弥陀仏」の名号が深く刻まれています。名号には抜苦与楽の働きがあるとされ、進行する人々に癒えさせるものだと言われています。



伊野姫パワーで待ち人来る

●越智神社 (おちじんじや)

豪道大師のその母「伊野姫」が祭神と伝えられている立待小学校の前の小さな社。古く豪道大師が子供の頃に母親が帰りを立って待っていたという伝説から「立待」の名称が生まれたとされています。



近松門左衛門が幼少期を過ごした、「近松の里 たちまち」、古い面影を残す城下町には、かつて栄えた活気ある土地の記憶があります。由緒ある神社には、日々の喧騒を忘れさせる神聖な空気が流れています。豊かな自然や草花には、心身をやさしく癒してくれる力があります。そんな「近松の里 たちまち」は、2013年に近松門左衛門生誕360年を迎え、それにあわせて「さばえ近松文学賞 恋話 (KOIBANA)」の募集を始めます。この冊子では、近松ゆかりの歴史と自然があふれる場所と、そこに咲く花に込められた恋話＝恋花メッセージをご紹介します。すべての場所を巡って、時を越えて人を元気にする近松のパワーに触れてください。

《この本の使い方》

近松にゆかりのある
パワースポットを、写真
と文章で紹介

訪れた記念に、
ちかもんくんスタンプ
を、押しましょう!

それぞれの場所に設置され
た「近松の里めぐり物語
BOX」「近松の里めぐりBOX」
の中に、スタンプや情報誌
が入っています。



「見どころ」「なんだろう」
「ひとやすみ」の3つに分
け、その場所ならではの
ポイントを紹介

「近松との縁」では、近松
門左衛門の幼少時代を振り返ります

さらに!応募してゲットしよう!

12
ポイント
ぐるっと
まわって
越前漆器製ご利益特製絵馬
をもろおう!

別紙の応募ハガキに12
カ所のスタンプを全部
集め、必要事項をご記入
の上50円切手を貼り
郵送してください。後日
「近松の里 たちまち パ
ワースポット+恋話めぐり」証明書とちかもんくん
グッズを郵送いたします。開題日には、立待公民館・まなべの館でも受け取ることができます。また、Wチャンスとして毎年10月に開催される「たちまち 近松まつり」で抽選会を行い、抽選で「越前漆器特製ご利益特製絵馬」をプレゼントいたします。

※詳しくは応募用紙をご覧ください。

恋話＝恋花 (KOIBANA)

恋話を題材とした作品が多い近松門左衛門。「近松の里 たちまち」をめぐり、各所で見かけた花々にも、昔から伝わる「恋話」や花の名を録んだ「恋歌」が存在します。花言葉と恋話&恋歌を紹介しながら、プチメッセージを届けます。

2013年、近松門左衛門生誕360年
『曾根崎心中』初上演310年を記念して

さばえ近松文学賞
恋話を募集します。

【テーマ】

近松の恋愛が時を越えて
現代によみがえる

(400字詰め原稿用紙5枚程度)

map ナンバー

1

近松門左衛門記念碑庭園

(近松の里めぐり情報館)

ちかまつもんだえもんきねんひていえん



東洋のシェイクスピアと称される近松門左衛門は、鯖江市が誇る劇作家。近松が幼少期を過ごした「立待」をめぐる旅は、ここ杉本町の立待公民館敷地内にある近松門左衛門記念碑庭園から始まります。庭園は、浄瑠璃に欠くことのできない三味線の形をし、初夏になるとサツキの花で彩られます。正面奥に近松の詩世文を記した碑があり、父の吉江藩士・杉森信義と近松が越前を離れるまでの解説が記されています。庭園手前には、福井県出身の作家・水上勉氏揮毫による「近松門左衛門先生由縁之地」と記された石碑も建てられています。



見どころ



近松の里めぐり情報館

立待公民館内にある「近松の里めぐり情報館」では、ただ一人の吉江藩主「松平昌高公」や、元禄三丈文筆のひとり「近松門左衛門」と鯖江との関わりについて紹介しています。文家の人形や衣装等の展示をはじめ、鯖江市在住の創作粘土人形作家かとうかず和氏による近松と鯖江に関するジオラマ風人形や、映像、展示等があり、子どもから大人まで楽しめます。近松の幼少時代を振り返ることができます。



七福神で遊ぶ近松の人形



ここに
スタンプを
おつけてね!

★この近松の里めぐり
情報館DXに
スタンプが
入っています。



サツキはツツジより
星が小さくて可愛いさ。



サツキ(杜鵑花) 花言葉: 協力を得られる、節約、勝利

恋話

KOI RANA

中国の伝説、蜀の地に天から下った「望帝」という王がいました。その地へ治水に詳しい「べつぎ」がやって来ます。べつぎの留守中、その妻と通じてしまった望帝は自分を恥じ山の中に隠れ、苦悶の末、死んで杜鵑(ホトトギス)に生まれ変わります。最も彼も激しく嘆き続け吐いた血が地上に落ち、そこから赤い花が咲き、杜鵑花と呼ばれたとされています。

※メッセージ「何事も度を越さないよう、控えめに」



水の神(龍)と、生命の再生(蛇)のお話が伝わる

map ナンバー

2

西光寺表門

さいこうじおもてもん



全国でも珍しく、殿号と呼ばれる寺院「石田殿西光寺」は、本願寺7世・存如が旧石田村に開いた道場を起源とし文禄4年(1595)、現在地に再建されました。表門は、吉江藩主だった松平昌親公が福井藩主を継ぐこととなり、廃藩となった吉江藩邸(館)の門が西光寺に移築されたと伝えられています。薬師門形式の門は寺院としては特異であり、建築様式でも江戸時代中期の特長が認めらることなど、当時の面影を残す希少なものと言えるでしょう。国の有形登録文化財に指定されています。



ここに
スタンプを
おしてね!
その近松の里めぐり
物語BOXに
スタンプが
入っています。



西光寺石壁の足元で
真っ赤な花を咲かせる大イチョウの花。



? なんだろう

「じゃぼんこう」の由来

江戸時代、西光寺に迎えられた第10世・寂周は、生来病弱だったため、乳母「お通」が同行。敵身的に世話をします。やがて、親鸞の再来とされるほど人々の崇敬を集めた寂周でしたが、健康が高まるほど健康が気になりお通。ついには自分の命を寂周に捧げて欲しいと池に身を沈めます。その年の親鸞講は雷雨となり、池から龍(蛇)となったお通が無い上がったという伝説から「親鸞講」が「蛇恩講」、「じゃぼんこう」と言われるようになりました。



近松との縁



大イチョウ

西光寺の境内にある推定樹齢400年の大イチョウは、立派の歴史を見守ってきました。秋になると黄金色に輝く木を見上げ、厳格治いを楽しんだ幼い近松が思い浮かびます。



ケイトウ「韓藍」(からあい)

花言葉: 色あせぬ恋、情愛、おしゃれ

恋話

KOI RANA

「秋さらば 写もせむとわが晴し 韓藍の花を 誰か探めけむ」(与謝蕨村)
秋に染めようと思つて蒔いた韓藍の花が、誰かに摘まれてしまった。韓藍の花は「思ひ人」を意味しています。

※メッセージ「時機を見極め、後悔するまえに告白を」



不動明王に見守られて力が湧いてくる

map ナンバー

3

糺野お清水

ただすのおしょうず



老杉が生い茂り、清水の湧き出る様子が京都の糺野に似ていることからこの地を「糺」と呼ぶようになりました。糺は鯖江台地の北西に位置し、大地と平地の間から湧くお清水は、神事に使われる名水として古来より大切に扱われてきました。また、野菜や農機具を洗う場所が区別され村人の生活にも欠かせない水でもありました。かつて数カ所あったお清水も、こちらを残すだけとなり年々その水量も減りつつあります。いつの日か、こんこんと湧くお清水に戻したいものです。立待村志には、糺に「糺清水」があったことが記されています。



水際に静かに咲く
かわいい花。



? なんだろう



お清水を守る白不動明王

糺野お清水に祀られているのは、右手に剣を持ち、左手に鏡を持つ白不動明王。あらゆる「魔」を滅ばし、幸福を与える仏様は、昔も今も糺野お清水の水源を静かに見守り続けます。



近松との縁



水路脇に隠れるように存在する糺野お清水

浅水川から西光寺前を流れる水路脇に、今一つになってしまった糺野お清水があります。近松の頃は、数カ所のお清水が水量も豊かにこんこんと湧き出していたそうです。



恋話

KOI BANA

パンジー(すみれ) 花言葉: 物思ひ、私を思ってください、私はあなたを思う、純愛

ヨーロッパでは古くから、愛する人に「天使に愛された花」のいい伝えをもつパンジーの花を贈ります。天使に愛された花が奇縁を起こしてくれそうです。

※メッセージ「素直な気持ちで、花に託してみては」



人と人を繋ぎ、物事をスムーズに運ぶ

map ナンバー

4

石田の渡し場跡

いしだのわたしばと



江戸時代から明治頃まで、水量が豊富な日野川では船を利用した「河川交通」が盛んでした。米やさまざまな物産が船積みされ三国湊まで運ばれました。古い文献によると、この石田にも舟渡し場があったとされ、日野川に交差する「浜街道（越前海岸から吉江に至る街道）」の渡し場として利用されたことが記されています。長さ18m・幅2mほどの渡し舟が一艘あり、石田橋50m下流の大きな柳が船着き場になっていたようです。明治40年代、道路が整備され木製の橋が架かると石田の渡し場も廃止されました。



ここに
スタンプを
おしてね！

やこの
近松の里の地図に
スタンプが
入っています。



子どもの顔を思い出そう
クローバーの花紋。



ひとやすみ



渡し場跡で往時を偲ぶ

現在、石田の渡し場跡がある日野川の河川敷には、青い芝生が植えられ整備が進んでいます。渡し舟が行き来し、旅人の足となっていた見晴らしのいい渡し場跡を眺め、往時を偲びましょう。



近松との縁



近松と幸若舞を繋いだ
石田の渡し

近松作品に大きな影響を与えたとされている「幸若舞」は、越前朝日町を発祥の地とし、能や歌舞伎の原型と言われています。近松は、この「幸若舞」を見るため石田の渡しを利用したのでしょうか。現在の石田橋の欄干は、当時をイメージした渡し舟がモチーフになっています。



クローバー（シロツメクサ）

花言葉：約束、私を思い出してください

恋話
KOI BANA

アイヌの青年が恋人に逢いにいくためにのった舟が沈みました。恋人は彼の亡骸を体に見つめ、沼に身を投げました。翌朝、その周りにはクローバーが咲き乱れたそうです。

※メッセージ「約束をおろそかにすると、気持ちが変わります」



難関突破! 遡りしてこそ得られるものがあるはず

map ナンバー

5

吉江七曲り通り

よしえなまがりどおり



正保2年(1645年)から29年間、松平昌親公を藩主とする吉江藩がありました。七曲りは吉江藩の城下町の名残りで、町人町の一つ新町から藩主の住む陣屋までの道のりを、七曲りの名の通り何度も屈曲させ大回りさせるという城下町特有の道路構造をしています。当時は、入口には木戸、境に高札場があったと言われています。現在は当時の佇まいを見る事は出来ませんが、変わらない地割りや道路から吉江藩当時の様子を伺い知ることが出来ます。



ひとやすみ



古い町並みと桜の木

吉江藩2万5千石の城下町の面影が残る、七曲り通り。一年を通して庵がありますが、春には桜の花で彩られ、美しい風情を醸します。



近松との縁



近松が暮らした城下町10年余りをこの城下町で暮らした近松。この界隈に足を踏み入れると、幻想的な雰囲気、文化的景観と古民家のすばらしさを堪能できます。当時の力平型の通りが現存し、町屋、商家などが往時を思い起こさせてくれます。



このスタンプを
おしてね!
この
近松の町並み(1645年)に
スタンプが
入っています。



千代田の町並みと
近松の町並み



サクラ
恋話
KIN BANSA

花言葉:純潔、優れた美人

「あしひきの 山桜花 一目だに 君とし見れば 我れ恋ひめやも」/大伴家持
山に咲く桜の花をあなたと一緒に眺められたなら、こんな風に花が恋しいとは思わないでしょう...病の床から恋人を思い詠んだ歌です。

※メッセージ「心が通じていても、言葉で伝えることも大事です」



悪夢を良い夢に替えてくれるという歴史ある古いお寺

map ナンバー

6

福正寺 ふくしょうじ



吉江藩関係の史跡が数多く残される吉江町周辺。こちらの福正寺もそのひとつで、創建は文治2年(1186)。元は天台宗の寺院でしたが長享2年(1488)に浄土真宗に改宗。戦国時代の戦火を被りながらも寺坊が守られ、松平昌親公が吉江藩邸を建築する際、土地を交換し現在地に寺域を定めました。この時、松平昌親公より多くの材木を寄進されています。長い歴史と人々の祈りに培われた不思議な力が感じられます。



ここに
スタンプを
おしな!
そこの
近松の歴史がわかるXに
スタンプが
入っています。



ピンクと白の千日紅
まるい花がやさしい。



見どころ



本堂正面軒下に 不思議な雲獣

こちらの木鼻に彫刻されているのは「狼」。豊秋 狼は、悪夢を食べてくれたり、悪夢を良い夢に替えてくれたりするそうです。



近松との縁



近松が遊んだ 歴史ある古いお寺

近松が、吉江藩士となった父と一緒に移り住んだのは福松君(松平昌親公の幼名)が元服した明暦元年。このとき近松は2歳。このお寺の境内で遊ぶ近松を思い浮かべることができます。



スズラン
恋話
KOI BANA

花言葉: 幸福、縁組、幸福が見えてくる、純潔

春の女神オスタラが、この花の守護神。パリの風習では5月1日にこの花を贈ると幸福が訪れるという、恋人に捧げる花です。

※メッセージ「終わることは、はじまること。一歩踏み出しましょう」



「学問の神様」菅原道真と乙千代丸を祀る親子愛パワー

map ナンバー

7

西番天満神社

にしばんてんまんじんじや



ご祭神は、「学問の神様」として知られる菅原道真公。公の第3子である乙千代丸がこの地に住み、公の像を彫ったとされています。その後、落雷により御神像は焼失し、作り直されました。菅原道真公を祭神とする西番天満神社は、近松の父が仕えた吉江藩主・松平昌親公の祈願所でした。立待の里の総鎮守の社でもあり、村人の信仰を集めてきました。後年60歳を越えた近松は、菅原道真の大宰府への配流を題材にした「天神記」という傑作浄瑠璃を書き上げます。



見どころ



乙千代丸神社

乙千代丸は、菅原道真公の第3子。父菅原道真が大宰府へ配流になったとき、京都を逃われ、家臣とともに立待地区の杉本の地に辿り着きました。乙千代丸は、神像を彫り、父の退屈として朝夕拝しました。その像を収めた天満宮の横に寄り添うように、乙千代丸を祀る神社が建てられています。



近松との縁



国性爺合戦の絵馬

近松の代表作のひとつ「国性爺合戦」は時代物の中でもっとも有名な作品。その絵馬が奉納されています。このあたりで一冊大きな絵馬として知られています。



ここに

スタンプを

押してね!

その後の歴史の聖地で

物語BOXに

スタンプが

入っています。



ウメ

恋話

KOI RANA

花言葉: 清潔な心、清白、愛の花心、忠義

「春なればうべも咲きたる 梅の花 君を思ふと 夜寐(よいも)も寝なくに/雪枝守飯氏安麻呂 梅は「君」のこと。恋する人を思ふと夜も寝られない…眠れない夜の恋心を詠んでいます。

※メッセージ「強がらずに、会いたい気持ちを素直に表現してみよう」



リーダーシップを発揮した松平昌親公を学び能力アップ

map ナンバー

8

吉江藩館跡

よしえはんやかたあと



吉江藩が成立した正保2年(1645)、吉江藩主・松平昌親公は陣屋や町並みを整備。従来の町に新しく整備した町をあわせて「十一口」、これを縦に並べて「吉江」とされ、立待郷吉江町が生まれました。昌親は、この頃から政治家としての手腕をふるい、土地を開墾し新しい農地を開拓したり、鍛冶屋や木綿の織物職人の育成など、商工業に力を注ぎます。結果、吉江は丹生郡の政治経済の中心として隆盛を極め、「小江戸」と呼ばれるほどでした。延宝2年、兄の福井藩主・光通が死去し昌親が福井藩主となるまで、わずか30年足らずでした。



? なんだろう



松平昌親公

瑞澤寺蔵

正保2年(1645)、結城秀康の子で第3代福井藩主・松平忠昌が死去。その後も子孫の松平光通が継ぐ。その時、松平光通は、弟の松平昌親公に2万5千石を分与するが、越前国内各所に分散していたため、まず本拠地の選定を行わねばならなかった。慶安1年(1648)、松平昌親公は陣所を吉江に設置することを許可され、吉江藩が成立しました。



近松との縁

近松の父が仕えた吉江藩

立待郷吉江の町が生まれた正保2年、昌親公はまだ6歳でした。その時、養育係となった付き人の中に近松の父である杉森信義の名があります。昌親公が元服したときに、杉森信義も2歳の近松とともに吉江に入ります。



ナadeshiko

恋話

KOI BANA

花言葉: 純愛、恋慕

「ひさかたの雨は降りしく なでしこがいや初花に 恋しく我が背」/大伴家持
雨が降り続いても、咲きたてのなでしこのように恋しく思われるあなた…慕
る恋心を詠んでいます。

※メッセージ「毎日が楽しくなるような、何かに恋してませんか」



「東洋のシェイクスピア」と称される近松を学んで諸芸上達祈願

map ナンバー

9

近松門左衛門坐像

ちかまつもんだえもんざう

(近松情報案内所)



鯖江市には、歴史・伝統・文化を感じるすばらしい地域の宝があります。その中でも全国に誇れるブランド力の高い宝として、江戸時代の文豪(浄瑠璃・歌舞伎作者)近松門左衛門の存在があります。2歳から10年あまりの多岐な少年時代を吉江で過ごした近松。その土壌は、越前鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。浅水川沿いの通りに面した見晴らしのよい場所に、作品を執筆しているかの如く筆を走らせる近松の坐像がどっしりと鎮座しています。

近松門左衛門の坐像が
あり、
近松情報案内所が
あります。

ここに
スタンプを
おしえてね!



うつとぎの白き百合の花が
いっせいに咲いていました。



ひとやすみ



近松情報案内所

近松関連の情報や案内チラシが
たっぷり、「近松の里」たちまちめぐ
りの情報拠点となる案内所です。
無料レンタサイクルも完備してい
ます。

ちかもんくん号に乗って
散策しよう!



無料レンタサイクル

「近松の里」を散策するのに、無料
レンタサイクルをご利用ください。
連絡先：現地にてご確認ください



ユリ

恋話

KOH KANA

花言葉：純潔、威風、無垢

「さ百合花 ゆりも逢はむと 下延(は)ふる 心しなくは 今日経めやも/大伴
家持 百合は「あとで」と重なる言葉、後で逢えると思わないと、今を過ごせな
い気持ちを表します。

※メッセージ「深呼吸。どちらも大事なら自分のペースを大切に」



信じる人に幸運を招く「三度栗」の不思議な話

map ナンバー

10

大谷公園

おたにこうえん

(実のなる公園)



大谷公園には、親鸞上人の「三度栗縁起」という伝説に由来する3本の栗の木があります。越後に向かう親鸞が、民家で説法をしました。しかし、誰も話を信じなかったため、焼き栗を庭に植え「この実が年に3度実を結んだらば、私の説法に嘘はない」と言い立ち去ります。後に、栗は1年に3度実を成し、「三度栗」と呼ばれました。3本の栗の木は、その子木を移植したもので、「実がなる」が「実る」となり、心願成就のご利益があるとされています。



ここに
スタンプを
おしてね!

その
近松の里めぐりBOXに
スタンプが
入っています。



夕暮けから夕闇へと...
夕陽的な情景に出会えます。



ひとやすみ



実のなる公園

グミ、栗、柿、イチジク等、実のなる樹木を植樹して、四季を通して「育て、収穫し、食する」といった体験学習型公園を目指しています。起伏に富む地形を活かした楽しい空間で、子供たちも自由に遊べます。



近松との縁



近松が愛した 立待の風景を眺める

左右の竹林を仰ぎ見ながら石段を登りつめると、旦那の山のどかな立待の町の景色が広がります。うぐいすを始め、いろいろな野鳥の声を楽しみながら、近松が愛した城下町に思いを馳せましょう。



リンドウ

恋話

KOI BANNA

花言葉:正義、恋している時のあなたが好き、きびしい愛情

平安時代、おしゃれな花とされ、女御たちの衣裳の模様になって使われました。リンドウが1本で咲く姿から「恋しているあなたを愛する」というやさしい花言葉ができました。

✿メッセージ「落ち込んだときは、ひとりの時間も必要です」



まっすぐ伸びる大杉にあやかって成長を祈願

map ナンバー

11

春慶寺

しゅんけいじ



寺伝によると、春慶寺の前身は泰澄大師が白山修行に立つ際、立待にあった草庵に名づけた「心敬寺」にあるとされます。戦国時代には、心敬寺を中心に一千坊がひしめいていましたが、織田信長の越前侵攻の焼き討ちに遭い現在の寺院だけが残りました。正保2年(1645)吉江藩成立後、藩主・松平昌親公の篤い信仰のもと、寺号を天台宗「春日山 春慶寺」へと改め、同藩の祈願所に定められました。泰澄大師伝記には、大師が三十八社より越知山へ通う途中、一草庵であった当寺において香や華を供えて遍拝したとあります。寺の西側には、徳川家紋の原型になった「二葉葵」が植えられています。



ここに
スタンプを
おしな!
※この
近松の墓前で「近松」に
スタンプが
ついています。



見どころ



本堂脇に鯖江市指定文化財
推定樹齢400年余の御神木(大
杉)の、まっすぐ伸びたその姿に
「子どもがすくすくまっすぐ育ち
ますように」と祈願する人も少なく
ありません。その傍らに、室町時代
から近代にかけて造立された117
基の石造物が遺存されています。
これほど多く遺存しているのは、市
内でも稀であり貴重だそうです。



近松との縁



幻想的な椿に何を思う…
境内に群生する椿。散りゆく花が
辺りを深紅に染めるその様は幻
想的で美しい。幼少の頃、この寺
の一角を徘徊していたといわれ
る近松は、どんな思いでこの花を
愛でたのでしょうか。



ツバキ

恋話

KOI BANA

花言葉: 安全な愛、恋愛な魅力、理想の恋

「あしひきの八重の椿つらに 見とも飽かぬや 椿系でける君」/大伴家持
見飽きることもあるでしょうか、この椿を植えたあなたを…椿は古事記にも
登場する、神聖な樹木です。

※メッセージ「鏡の中の自分、見つめてみて」



近松の産湯伝説のある、千古の昔より湧き出る健康長寿の水

map ナンバー

12

榎お清水

えのきおしょうず



ひとやすみ



春慶寺本堂横の竹林の中の小径をほんの少し下って行くと、お泉水「榎お清水」のある山麓に出ます。ここは、千古の昔より湧き出ており、健康長寿の水として親しまれ、村人や旅人はお不動様に手を合わせ、お清水で喉を潤したといわれています。近松の時代、吉江藩主・松平昌親公は「榎お清水」を笥谷石で3つに仕切り、水飲み場と洗濯場を整備して村人の憩いの場とし、さらに吉江の城下町に水を引き入れるため木樋を敷設して上水道を整備しました。池の中心は三味線のパチの形をしています。



お不動様が見守るお清水

近松の時代から、張れることなく今なお水を湧えています。カルシウムやマグネシウムなどのミネラル分が豊富で、温度の炭酸ガスを含んでいるまるやかで清涼感のある水は、平成22年「ふくいのおいしい水」に認定されました。市指定文化財にも指定されています。



近松との縁



近松少年が親しんだ水辺

お清水付近は「池原広場」として整備されています。その泉の底から時折、お清水が湧き出る様は、見ているだけで心落ち癒させてくれます。また、近くには蓮池や中瀬池があり、近松少年が親しんだ水辺の自然環境を再現しています。近松作品には、蓮の花が多く出てきます。この辺りで遊んだ当時を思い出して作品を描いたのでしょうか。



ハス
恋話
KOE BANNA

近松 遠くやっかん、蓮華、仲夏

中国の伝説、夏の深夜、月の仙女は下界の川面を鏡に化粧をしていた。その美しさに見惚れていた川の主の心に燃えふられ、愛の象徴とされるかんざしをうっかり落としてしまう。川の主は急いで水面に浮上するが、川面には蓮の花が一面に咲き乱れ、持っていたかんざしも蓮の花びらに変わっていた。川の主は唇を返すことができず、恋は実らなかった。

※メッセージ「結果を求めすぎないで、まずは冷静に」

江戸時代を代表する文豪 近松門左衛門

ちかまつもんざえもん

人形浄瑠璃や歌舞伎のすぐれた作品を数多く残した近松門左衛門(1653~1724)は、多感な少年時代、人間形成の大切な時期を鯖江で過ごしています。義理人情に悩む日本人の人間らしい姿を描き出す近松文学の土壌は、鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。「東洋のシェイクスピア」と呼ばれるほどに、人間の悲しさや悪かき、やさしさを描いたその作品は360年を経た現在も愛され続けています。



近松門左衛門住居之遺
[註] 特設展示場

鯖江市では「豊かな自然につつまれる魅力と、
人と歴史が見える「近松の里」づくり」をテーマに、
住民と行政が一体となって、まちづくりを進めています。



「ちかもんくん」は、鯖江で少年時代を過ごした文豪近松門左衛門により親しみ、また近松文学に対する理解を深め、それをもとに「歴史を活かしたまちづくり」や「近松の情にふれあうまち鯖江」を広く内外にPRするため公募により決定。近松門左衛門の少年期をイメージして平成10年に誕生しました。



近松情報インフォメーション

鯖江市まなべの館 2F「近松の部屋」

〒916-0024 福井県鯖江市長泉寺町1-9-20 Tel.0778-53-2257

立待公民館「近松の里めぐり情報館」

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2 Tel.0778-51-3376

近松会館「近松情報案内所」

〒916-0024 福井県鯖江市吉証町15-77-7 ※無料レンタサイクルがあります。

www.city.sabae.fukui.jp/index.html (鯖江市ホームページ)

近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2(立待公民館内) Tel.0778-51-3376

■さばえ近松文学賞 ～恋話 (KOIBANA) RETURNS～ ■主催者

令和5年10月12日 発行

近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005

福井県鯖江市杉本町702-2 (立待公民館内)

TEL 0778-51-3376

【電子書籍版編集】

発行者 [DoCompany出版 \(ポポブックス\) BoboBooks](#)

東京都港区南青山2-2-15 ウィン青山14階

TEL 050-3692-4434

福井県福井市灯明寺1丁目1301

TEL 0776-28-5233

<https://bobobooks.com>